

伊勢物語の歌の性格

—所謂第二次成立の諸段をめぐって—

室 伏 信 助

本稿は、拙稿「伊勢物語の歌の性格——古今集所収業平歌を含む段をめぐって——」（『中古文学』第2号）につづき、尊経閣文庫蔵在中将集と宮内庁書陵部蔵雅平本業平集に所載の歌から古今集所収の業平関係の歌を除きたいわゆる第二次伊勢物語の諸段の歌について、その性格を物語との関連において考察するものである。この第二次伊勢物語とは、片桐洋一氏のすぐれた研究（『在中将集成立存疑』国語国文第26巻第2号、「伊勢物語の成長に関する覚書」同第27巻第7号など）によって明らかにされた拾遺集以前の伊勢物語の一形態から、古今所収の業平歌関係の諸段を除いた次の二十七章段をさし、その命名は「伊勢物語の三元成立の論」（『文学』第29巻第10号）を書かれた辛島稔子氏によるものである。

1	10
16	16
18	18
39	39
40	40
42	42
43	43
44	44
45	45
46	46
52	52
59	59
66	66
67	67
68	68
77	77
78	78
79	79
81	81

一

伊勢物語の成立過程をさまざまな外的資料によって跡づけることは、

それ自身重要なことであるが、それが歌の増益に限る場合と、物語の部を含む場合とは、全くニュアンスを異にするのである。しかし、従来はその点が必ずしも厳密ではなかったと思う。例えば現存伊勢物語において古今所収業平歌を含む二十六章段を、最も古い成立を示すものとして第一次伊勢物語とみる考えは一般化したが、古今詞書とそれに該当する伊勢諸段の文章の相違は無視されたまま、一括評価されている。これは古今集詞書の資料的価値が十分闡明されない段階では或る程度やむをえないが、少なくとも業平歌の詞書については、その資料性を高く評価すべきこと、前掲の拙稿で述べたとおりである。即ち、古今採業平歌の詞書はその表記の特殊性から、当時すでに物語化されたものをかなり厳密に記録していること、従って古今採録の段階こそ外的資料によって捉えうる第一次成立の物語であるといつてよいのである。その詞書と大きな相違のある現存伊勢の本文は、どう見ても古今採録の段階から飛躍的な発展をとげたものと見るより外はない。就中、他歌集・伝誦歌などを多数含む段は、たとえ古今所収の業平歌が中一首あるからといって

伊勢物語の歌の性格

も、所謂第一次成立の範疇において論じられるとしたら、その誤りは大きいだろう。

同じ論理は、この第二次成立といわれる部分についても言えるかも知れない。ただ在中将集・雅平本業平集所載の歌が物語の成長の跡をかなり具体的に示しこそすれ、その詞書は性格が複雑なため現存伊勢の本文と直接に比較する対象とはならず、従ってもっぱら歌の増減によってのみ現存伊勢諸段の成立過程を推測するにとどめなければならないのは致し方ない。ところで在中将集・雅平本業平集に存する歌は必ずしも共通せず、その差異は歌数についていえば前者が六首多く、該当する段についていえば同じく前者が四段多い。今その事情を伊勢の各段について比較し、さらに伊勢諸本の異同の状態を知るために次の表を作ってみた。

伊勢 章段	初 二 句		在本	雅本	伊勢諸本異同
	初	二 句			
1	かすが野の若紫の みちのくの忍ぶもぢぢり		× ○	○ ○	
10	みよし野のたのむの雁も わが方によると鳴くなる		○ ○	○ ○	
16	手を折りてあひ見しことを 年だにも十とて四つは これやこのあまの羽衣 秋や来る露やまがふと		× × ○ ○	× ○ ○ ○	誠本コノ歌ナシ
18	紅にほふはいづら 紅にほふがうへの		× ×	× ○	
39	出でていなば限りなるべみ いとあはれ泣くぞ聞ゆる		× ○	× ○	塗本コノ段ナシ

94	秋の夜は春日わする 千の秋ひとつの春に	× ○	× ○	塗本コノ段ナシ
93	あふなく思ひはすべし	○	○	
86	今までに忘れぬ人は	○	○	
85	思へども身をしわけねば	○	(○)	
81	しほがまにいつか来にけむ	○	○	
79	わが門に千尋ある影を	○	×	
78	あかねども岩にぞかふる	○	×	
77	山のみなうつりてけふに	○	×	塗本コノ段ナシ
68	雁なきて菊の花さく	○	○	
67	きのふけふ雲のたちまひ	○	○	
66	難波津をけさこそみつの	○	○	
59	住みわびぬ今はかぎり わがうへに露ぞおくなる	× ○	× ○	塗本「つひに行」ノ歌 ト合セテ一段トセリ
52	あやめ刈る君は沼にぞ	○	×	
46	目かるとも思ほえなくに	○	○	塗本コノ段ナシ
45	ゆく螢雲のうへまで 暮れがたき夏の日ぐらし	× ○	× ○	塗本コノ段ヲ各一首二 段ニ分ツ
44	出でてゆく君がためにと	○	×	
43	ほととぎす汝がなく里の 名のみたつしでのたをさは 庵おほきしでのたをさは	○ ○ ○	× × ×	
42	出でてこしあとだにいまだ	○	○	
40	出でていなば誰か別れの	○	○	(備考参照)

102	そむくとて雲にはのらぬ	○	○	塗本・誠本コノ段ナシ
101	咲く花のしたにかくるゝ	○	○	塗本・誠本コノ段ナシ
100	忘れ草生ふる野べとは	○	×	誠本コノ段ナシ

(備考) 第40段は雅本および首・神・塗・誠・阿・泉の諸本「いづこまでをくりはしつと……」の歌を合わせて一段とする。なお伊勢諸本の略称は『伊勢物語に就きての研究』(校本篇・補遺篇)によって示した。

右の表によれば、上段の伊勢物語二十七章段には歌が39首あるが、そのうち在本来に該当するものは二十六段30首、雅本は二十二段24首である。この相違は片桐氏によれば、在本来と雅本とはその依拠した伊勢物語が異なるためと解されており、その結果、一段の有無についていえば、例えば18段は在本来に全く欠けているが雅本ではその一部が現在とは多少異なる形で存在したと見られ、また逆に、43 77 78 79 100の諸段は在本来にあっても雅本になく、形成の過程を異にしていたことが知られる。さらに各段の内部における異同を見ると、初段の二首目の「みちのくの忍ぶもぢぢり」の歌が在本来では欠けているが雅本には存し、16段四首のうち、在本来は終りの二首を欠くが雅本は一首のみを欠くといった具合に、その成長過程が本によってずれている。また這般の事情を現存伊勢諸本について見ると、伝来の過程に生じたかも知れない改竄を含めて、伊勢物語本文の成長とその変化の実相は、文学史的に見てもすこぶる興味深いものがある。

二

さて右のうち、在本来・雅本共通の歌をもち、しかも現存伊勢(定家本)

伊勢物語の歌の性格

に一致する段(仮りに(A)とよぶ。以下同じ)は全部で十二段あり、また在・雅両本に共通の歌をもつが、現存伊勢(同上)より歌数の少ない段(B)は四段、在・雅両本の歌が共通せず、しかも現存伊勢(同上)と一致しない段(C)は三段、在・雅いずれも一方のみ歌を有する段(D)は八段ある。(A)(B)……それぞれに該当する伊勢章段を示すと、次のようになる。

- (A) 十二段……10 42 46 66 67 68 81 85 86 93 101 102
- (B) 四 段……39 45 59 94
- (C) 三 段……1 16 40
- (D) 八 段……18 43 44 52 77 78 79 100

定家本伊勢物語の形態を物語成長の一到達点と仮定すると、すでにその域に達している段(A)は全体の半数近くを占め、また残り半分が到達点に到る過程にある段(B)(C)と、まだ一方にしか物語化の進んでいない段(D)に分かれるのである。しかし、定家本伊勢を基準にしない見方からすれば、在・雅両本共通の成長を示している段は、(A)(B)合わせて十六段となり、両本一致しない成長過程にある段は、(C)(D)合わせて十一段となる。

以上は、両本に存在する歌によってのみ推定しうる物語の成長過程にすぎないが、第二次伊勢の内部構成を知る一応の目安とはなるだろう。こうした推定は、今後さらに新資料の発見に伴う研究の進歩によって或は修正され、或は補強されるかも知れないが、さしあたり、現在この二つの資料に基づいて整理を試みる限り、以上のように、第二次成立の過程を、ほぼ三つの段階に分けて吟味することは許されるだろう。

さて順序に従い、まず(A)の十二段について物語の内容を見よう。冒頭の「むかし、をとこ」という書き出しは、十二段のうち十段(42段のみ大・神なし)に及び、ほとんどの段がいわゆる第一次伊勢の「むかし、をとこ」の虚構性をそのまま表現形式の上に受け継ぎようとしていることが知られる。これは(B)の四段のうち三段、また(C)の三段のうち二段のいずれも同じ形式を踏んでいるのと、比率の上ではさして変らないが、(D)の八段中わずか二段しかこの形式を踏んでいないのとは大きな違いがある。形式の選択は物語の内容と深い関係をもつため、この差異は物語の主人公の位置に何らかの変化が生じたものとして注意されるのである。この問題は後で詳しく検討するとして、この(A)(B)(C)の諸段に見られた形式の踏襲は、そのまま内容の上においても、第一次伊勢を形成した意図を継承し、深化発展をとげたものとして判断してよいであろうか。以下、(A)の諸段の内容から吟味しつつ、具体的にこの疑問に答えていきたい。

まず66段から68段にかけての三段は、都を離れ地方に旅する物語としてまとまっている。この一群の物語の根幹をなすものは、あの第一次伊勢に見られた「東下り」の物語であろう。男は「身をえうなきものに思ひなして、京にはあらし、あづまの方に住むべき国求めに」(9段)といつて、生き難い都を捨て去るが、道々望郷の念に耐えず、ここかしこに嗟嘆して歌を詠む。その哀切な調べが後世の紀行文学に及ぼした影響は大きい。この伊勢物語においてもその成長過程に、早くも旅する男の姿が点描されるのである。「あにおとと友だちひきゐて難波の方」へ行

ったり(66段)、「思ふどちかいつらねて、和泉の国へ」出かけた(67段)、また同じ和泉の国「住吉の郡、住吉の里、住吉の浜をゆく」(68段)といった具合に、あちこち出歩いているが、旅の動機はいずれも「津の国に領る所ありけるに」であり、「逍遙しに」である。その結果「いと面白ければ、おりみつづく」のである。たとえ歌の中で「これやこの世をうみ渡る舟」と詠み、「花の林をうしとなりけり」と歌っても、物語の記するところに従えば、全くの行楽、それこそ「みやび」の旅に外ならない。このように、歌の訴える内容と物語化の方向とが一致せず、ずれが生じているところに、第二次伊勢物語の一つの特徴が見られるのである。この事實は、例えば「難波津を」の歌の詞書に「身のうれへ侍りけるに、業平朝臣」と記す後撰集(雑三)と比べてみることによっていっそう明確になるだろう。同じ歌語りを基にしたとしても、その形象化の方向は全く異質なのである。

三

86段はこんな物語である。或る若い恋人同志が、それぞれ親の反対をおそれて、思いを遂げることができなかった。年を経たがその機会にも恵まれず、ついに望みは絶たれたというもの。

今までに忘れぬ人は世にもあらしおのがさま、年の経ぬれば
右は古今六帖にも「昔あへる人」として出ているが、この生活の波に押し流された道理の歌を中心に、若い男女の夢も空しい現実の姿を語るうとしているのだろう。しかし、歌の前に「年ごろへて、女のもとに、なほ心ざしはたさむとや思ひけむ、男、歌をよみてやれりけり」とある

説明では、どうも素直に歌の意味には結びつかない。「女のもとに」以下を大島本・塗籠本などのように「女のかたよりこの事とげむといへりければ、男、歌をよみてやりりけり、いかゞ思ひけむ」とあるのに従えば、「今までに」の歌は、男の求めを拒絶する女の返歌として理解することもできるが、それにしても結びの一句「男も女もあひはなれぬ宮仕へになむ出でにける」は何を意味するのか。窪田空穂氏は「これはその生活をとおして、初恋の何らかの展開を予想しての言である。巧みである」（伊勢物語評釈）と述べておられるが、そうすると将来に望みをかけたことになるが、前文との続きにやはり不安を覚える。このように86段は、地の文の表現に説明不十分の個所が目立つが、歌を中心に考えるならば、やはり生活的現実の優先を意図したものであることには変りないだろう。

つづく93段にしても、事情は前と同じである。「身はいやしくて、いとなき人を思ひかけた」男が詠んだ歌、

あふなあふな思ひはすべしなぞへなく高き卑しき苦しかりけり

要するに身分相応の恋をするものだ、という道理を説いた歌である。

「身はいやしくて」が現実なら「いとなき人を思ひかけた」は理想なのに、両者の谷間に渡す架橋を男みずから「あふなあふな思ひはすべし」といって取り外してしまうのである。ここには最早、第一次伊勢に見られた築地のぐずれから通う情熱（5段）もなく、神の斎壇を踏みこえる気概（69段）もない。あるのは現実をわきまえる道理だけである。そのような主人公を、依然として「むかし、をとこ」として描き続けていく

が、一旦現実に追隨したからには、そう易々と理想に天翔けることは許されないのである。

42段は、多情な女と知りながら関係を絶てないでいる男のみじめな姿態を描く。「しばしばいきけれど、なほうしろめたく、さりとして、いかでかはたえあるまじかりけり」といった有様である。不安な気持は隠しきれず、ついに女を疑って歌を詠む。

出でてこしあとだにいまだ変らじを誰が通ひ路と今はなるらむ

この歌は後に新古今集（恋五）にとられたくらいよい歌なのかも知れない。歌の絶対評価は時代と共に移り変わるものだが、この段の中において見る限り、歌は物語の内容に規制されたかたちで問われなければならぬだろう。結局この段の示すことからは、歌のよし悪しに関係なく、現実に追隨した「むかし、をとこ」の末路を描くことにあったといえよう。

(A)の諸段に属する「むかし、をとこ」の恋の部は、ほぼ以上に尽きるといってよい。これを第一次伊勢と比べた場合、恋愛という人間関係において、物語の形式と内容とのアンバランスが殊に顕著であったことを指摘しておきたい。しかし伊勢物語の愛の相は単に恋の部にとどまらず友情をはじめ主従の情誼、親族への情愛など幅広く描かれていること、周知のとおりである。例えば46段。「いとうるはしき友ありけり。片時さらず相思ひけるを、人の国へいきけるを、いとあはれと思ひて別れにけり。」しばらく経って、その友から心細やかな手紙が届く。男は歌をよんで贈った。

目かるとも思ほえなくに忘らるゝ時しなければ面影にたつ

物語のつづる内容と、歌の心とが一体化して、まことに美しい一篇となつてゐる。恋につまずく男も、友情の世界ではまだ人間に対する信頼に満ちあふれた姿を生きいきと示している。

では主従の関係はどうか。例えば85段。「童よりつかうまつりける君、御髪おろし給うてけり。」これは第一次伊勢に見えた惟喬親王の出家を語る83段と関連がある。時は同じ正月、昔親王に仕えた人々が集つて「大御酒たまひけり。」ひねもす雪が降りしきるので、「雪に降りこめられたり」という題で歌を詠んだ。

思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつもるぞわが心なる

83段の救いのなさに比べて、この段は寂しさの中にも何かほのぼのとした、心温まるものを感じさせる。「雪のつもるぞわが心なる」という結びに意味の重層性があり、それが物語の語る状況を巧みに抽象している。歌を詠むことが、そして歌を詠む状況を形造ることが、そのまま人間の心と心とを結びつける積極的な役割を果たしていることを、この段は何よりもよく語っているのである。これも第二次伊勢の歌の一つの性格として、注意しなければならないだろう。

四

今一つ、表現の気になる段がある——101段と102段。内容に共通する面はないが、主人公に当る男が、いずれも歌を詠まない人物として紹介されてゐるのである。結果的には歌を作っているが、それをどうして「もとより歌のことは知らざりければ」(101段)といい、「歌は詠まざりければ」(102段)と断わるのか。まず101段は、行平の家で饗応した時、主客である藤原良近の前に活けてある立派な花を題に歌を作った。業平と覺しき男が人に強いられて、

咲く花のしたにかくるゝ人を多みありしにまさる藤のかげかも
と詠んだところ、「などかくしもよむ」と問われ、「藤氏の殊に栄ゆる思ひてよめる」と弁解して助かったという話。歌の解には昔から「風の心もありぬべし」(省聞抄)のように諷刺の歌と見る説があり、今井源衛

氏(『伊勢物語』日本文学講座IV日本の小説所収)もこの立場から「諷刺の対象は藤氏であり『下にかくる人多み』には、藤氏一門のかげに次々と姿を消し去ってゆく他の弱小氏族の運命をこめているにちがいない。その危険な諷刺をそのまま見抜いた同席者が、こともあろうに良近の面前でと、色をなすと、しゃあしゃあといふ言遁れをして、一同の口を閉じさせてしまった。『もとより歌のことは知らざりければ』というのも、あらかじめ逃げ場を用意したもの」と説かれた。それに対して片桐洋一氏(『伊勢物語の成長と構造』国語国文第27巻第12号)は「藤原氏の極盛期におもねる歌、媚の表現以外の何物でもあるまい」と反駁され、「もとより歌のことは知らざりければ」は「単に歌が拙劣であるとか言葉が足らぬとかいうことのための卑下謙退ではなく、身分的な劣等意識から生じた卑下謙退の辞」と断定された。

両説とも先人の思い及ばぬ創見に満ちており、今井氏の立論が、諷刺というものを平安貴族社会の解体の中から生まれた批判的個人の所産と見る巨視的な歴史の認識に基づくのに対して、片桐氏の論は伊勢本文の

成長過程における作爲の変化という現象の中に捉える微視的な立場を強く示しているのが特色である。さて「咲く花の」歌が諷刺かどうかは、物語の説明の仕方によって変わってくる。もし物語が歌の前の部分だけだとしたら、片桐氏のように媚の歌——とまで言えなければ、目崎徳衛氏〔在原業平の歌人的形成〕日本学士院紀要第24巻第5号〕のいわれる「ごくあたり前の正客へのお世辞」ほどの意をもつ歌といつてよい。しかし後半の説明には、何か異質なものを感じるのである。「などかくしもよむ」は結びの「みな人、そしらずなりにけり」から考えると、弁解しないことには謗られる内容を歌自身もっていたという構想であり、それはやはり言い遁れによってしか表現できない屈折した意識の表われと見る外あるまい。又こうした見方が、片桐氏のすぐれた本文研究に背馳するものとはならず、むしろそれを補強する見方にさえなりうるのである。すなわち、片桐氏は「もとより……」を身分的な劣等意識から生じた卑下——裏返せば名譽と定義されたが、私は第三次成立といわれる部分に「むかし、をとこ」が歌を全く詠まない段が六段もある事実を重く見て、この断わりは、そこに到る前触れと解する。102段にも、男は「歌は詠まざりけれど」相手が「もと親族なりければ、よみてやりける」とあり、条件が限定されなければ歌がよめないことを示している。101段も同様で、人に強いられなければ歌が作れない状況をこそ重視すべきなのである。歌によってのみ人間関係の連帯性を願ひ、人間恢復をめざす行き方がすでに時代遅れになってしまった嘆きは、平中物語の主人公に色濃くかたどられた（小町谷照彦氏「平中物語論序説」日本文学第13巻第

6号)。平中の恋は歌なくしてありえない、そしてそのことが同時に滑稽な時代錯誤に通ずることを、あの物語は執拗に語っている。伊勢物語も、この第二次成立の中に、すでにその芽生えが看取されるのである。そしてそれは、やがて歌をつくらぬ主人公の物語へと転化していくのである。諷刺・諧謔はこうした精神的基盤に生ずること、今井氏のいわれる歴史的現実に通ずるものがあるとはいえないだろうか。

五

第二次伊勢物語の中に、歌を詠まない主人公の片鱗がうかがわれたことは、歌に対する作者の態度に大きな変動が生じたことを、暗に予想させるものである。これは歌が、現実の中でいかなる意味を新たにもち始めたかという問題と切り離して考えることはできない。以下、定家本伊勢物語の形態に近づきつつある(B)(C)の諸段をめぐって、この問題を考えてみたい。

まず初段を見よう。この段がすべての現存伊勢物語の冒頭に位置し、或る意味では青春の文学伊勢物語を象徴する性格を形造っているとさえいえるのである。成人した若者が、春日の里に狩に出かけ、そこに美しい姉妹を発見して、満身の懸想をする。その若々しい情熱と「放縦不拘」自在の行為とが、青春の躍動を伝えて余りあるものがある。この段が第一次伊勢の41段に発想を得ているらしいこと、これまた片桐氏の見事な推断（「伊勢物語注釈研究序説」）「国語国文第34巻第8号」によって納得されるところだが、この段の原初形態は在本のように、恐らく「かすが野の若紫のすり衣」の歌一首のみを含む物語であつたらう。ところが雅

本では、第二首「のみちのくの」の歌が見え、ほぼ同時代に一方ではすでに現存本の形態を作り上げていたことは、注目に価する。なぜならば二首目の歌は、ただ単に「かすが野の」の歌の注解の役割を果たすばかりでなく、古今集所載の河原左大臣作の歌が本来もっていた意味とはかなり違った意図で引かれており、また結びの一句「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」は、この物語に表われた「むかし、をとこ」の行為を、過去のものとして追憶する態度を示しており、そのいずれをとってみても、前半に見られた青春の躍動とは、かなり質の違ったものが表わされているからである。

同じような行き方を示した段として、40段がある。美しい婢と通じたまだ部屋住みの男の話。その男は、二人の仲を割こうとした親に抗う力もなく、「女も卑しければ、すまふ力なし。」そうこうしているうちに、お互いの愛情はいっそう深まり、とうとう親はこの婢を追い出した。男は血の涙を流して歌を詠んだが、ついに息絶えてしまう。

出でていなば誰か別れの難からむありしにまさる今日はかなしも
右は定家本に拠って示したが、塗籠本は叙述が異なり、まず放逐された女が人にことづけて詠んだ歌、

いづこまで送りはしつと人間はばあかぬ別れの涙川まで
があり、つづいて男が「出でていなば」の歌を詠んで息絶える結構になっている。また広本系の諸本は、この「いづこまで」の歌を男の蘇生後に載せ、女の歌を聞いて再び絶え入る話になっている。しかも男の歌の初句が塗本・広本系共に「いとひては（＝私ライヤニ思ッテ出テ行ッ

ノナラ）」と多少表現が異なり、これだと意味ははっきりするが、やや理に堕ちた嫌いがあり、字余りでそれと意味がとりにくくても「出でていなば」の方が傷心のはげしさを訴える表現としては力強い。それにこの段の前後数段に見える歌が、すべて「出でていなば」(39段)「出でてこし」(42段)「出でてゆく」(44段)と類似の表現を用いており、やはり原形は定家本に近い表現ではなかったかと思う。とにかくこの物語は主人公たる男がその制約された条件の中から、浪漫的に飛躍することのできない現実の姿を克明に描いている点、第一次伊勢とは異なる主人公の生き方が問われねばならなかったのである。では、この男に許された自由とは何か。悶絶——それである。ここに40段の主題があり、この主題が「出でていなば」の歌に到る叙述の中に、きわめて簡潔に描かれているのが特長である。ところが後半の叙述は、また全く別の意識によって支えられているのである。端的に言って、それは説話の世界における蘇生譚に外ならない。たゞ「いでていなば」という女の歌の位置が諸本によって浮動している点から見ると、或は蘇生譚は後から添加したものかも知れない。しかし、いづれにしても結びの一節「昔の若人は、さるすける物思ひをなむしける。今の翁、まさにしなむや」は、初段末尾の文と同然であり、蘇生譚の有無に関わりなく、「さるすける物思ひ」をした若者の行為を、すでに過去のものとして追憶する立場に作者がいることだけは疑いない。

だがしかし、初段といい、この40段といい、若者の精一杯の生きかた——その若々しい青春の像が、たとえ追憶の彼方にあるものとしても、

それを志向する精神のすがたは銘記されねばならないだろう。何となれば、この志向性が失われたところに、形は似ていても、全く内容の異なる物語が出てくるからである。

六

59段は、「むかし、をどこ、京をいかゞ思ひけむ、」東山に住む決意をした歌が記される。

住みわびぬ今はかぎりと山里に身をかくすべき宿求めてむ

この歌は後撰集雑一に「世の中を思ひうじて侍りけるころ、業平朝臣」として出ており、古来「業平左遷の時分にや、まず都を出でて東山にありけるか」(愚見抄)と疑われてきたものだが、古今ほど作者に信がおけぬとしても、歌の内容から、都に絶望した男の気持は、初句切れの強い調子や率直な表現もあって、かなり訴える力をもっている。しかし、この遁世の志を抱いた男の行為を「いかゞ思ひけむ」と述べる作者の真意は、「いかゞ思ひけむ」皆目わからない。あの東下りの段で「身をえうなきものに思ひなして」都を捨て、東国に新天地を求めた男の姿は、もうここにはないのである。従って、このあとで「物いたく病みて、死に入りたりければ」顔に水をかけられ、息を吹きかえし、「わが上に露ぞ置くなる」の歌を詠んだというのは、池田亀鑑氏もいわれたように「作者はどうつもりで書いたのか知れないが、滑稽な感じである」(伊勢物語精講)。この歌は、古今集雑上に、「題しらず、よみ人しらず」として出ており、もともとこうした蘇生の状態に詠み上げた歌などではないのである。折口信夫氏が「死の状態に陥って水を吹きかけられて、どうに

か生きかへったといふ様な椿事の真最中に、いくら雅かなる昔人であるとはいへ、歌を詠むなど余りに呑気すぎる話である。この歌はどこから見ても明らかに『七夕』を読んだ歌である」(『上代文学解釈法の問題』折口全集第29巻所収)と述べておられるのは尤もであるが、そうした一種の伝承歌をこの物語に付随させて語る方法は、どう見ても説話の蘇生譚の類で、この主人公を歌によって内面的に捉えて行く第一次伊勢の手法とは、根本的に違うものである。ところで塗籠本はこの段を最終の段に置き、そのあとに「つひに行く道とはかねてききしかど」の辞世の歌をつけて「絶え入りにけり」と結んでいるが、そうなると生き返ったり死んだり、広本系諸本の40段と同様、まことにあわたしい最期になってしまふ。在本・雅本共に「わが上に」の歌がないのは、まだ蘇生譚にまで転化しない姿をとどめているわけだが、人の死を暗示する「今はかぎり」や「つひに行く道」などの語句があれば、歌の性格にお構いなく、たちまち蘇生譚に仕上げる説話的関心が、すぐあとに待ち構えていたことは事実である。この男を死に追いやる内的必然性が作者になければ、主人公は脇役・端役に転落するか、戯画化されるかの運命にさらされていたのである。

「むかし、をどこ」の主役から脇役への転落——それは第二次伊勢物語が語る一つの冷厳な事実である。前述したように、(D)の諸段において形式の上においてすら「むかし、をどこ」はすでに主人公たりえない。しかも(C)の段階に、早くもその萌芽が見られるのである。

16段は、紀有常の話である。「三代の帝に仕うまつりて、時に遇ひけ

れど、後は世変り時移りにければ、世の常の人のごともあらず。人柄は心美しくあてはかなることを好みて、こと人にも似ず。貧しく経ても、なほ昔よかりし時の心ながら、世の常のことも知らず、「長年連れ添った妻が尼となって別れるに際して、餓別もしてやれぬ悲しさを友に訴え心の籠った贈物を受ける物語である。この段については、すでに野口元大氏の、女性史の立場からする犀利な分析（『みやびと愛——伊勢物語私論——』日本文学第11巻第5号）があるので、随時参照しつつ、それはやや異なる視点から歌の性格を考えてみたい。

見られるように、この段は紀有常の反俗的な性行とその不遇を描いたものである。實在人物を起用する方法は、第一次伊勢にも古今の詞書と照応してかなり多く、特に惟喬親王の物語にこの有常が付随して登場するなど、創作の要因に何か同族意識を窺わせるものがあること、前稿に述べたとおりだが、この段はその有常に焦点を絞り、史実を織り交ぜながら語っていく。ところがこの史実については、古注以来の誤りを指摘し、「実録にあらざること史伝に合せて知るべし」（臆断）と論じた契沖の合理的判断によっても知られるように、史実を装った虚構なのである。ではなぜ、作者は史実にそむいてまで、有常の物語を語ろうとするのか。野口氏は「それは一言でいえば、作者の同情がこの有常という人物に集中されているため」と言われ「有常の世外に超然たる精神が語られるのであるが、その際作者は有常の落魄を単にかれの無能に帰せず、かえって権勢に屈せず、濁世にあって己を清く守ったために、世に容れられない悲劇の主人公として、かれを読者に印象づけようとするのであ

る」と説かれた。

このように16段は、有常が物語の主人公であり、「むかし、をとこ」はこの有常夫妻に深い同情を寄せる脇役にすぎない。従来はこうした世俗を超越した有常と、うるわしい友情を結ぶ「むかし、をとこ」の物語に鑑賞の主眼がおかれていたが、野口氏は逆にこれまで軽視されていた妻の座を見直す立場から、有常の清廉孤高の実体を暴かれたのである。破局に立たされた有常は、当初作者によって賦与された理想像とはうらはらに、はじめて自分の無能さに気づく一人の愚かな男にすぎない。

手を折りてあひ見しことをかぞふれば十といひつゝ四つは経にけり
この歌にこめられた真率の嘆きは、そのままこの物語をつづってきた作者の心でもあったわけで、作者はそれを描くことによって確認したのであった。しかもこの有常の不幸に対して、「むかし、をとこ」は「いくたび君をたのみ来つらむ」と深い同情を示しこそすれ、何ら主導権をもちえぬ傍観者にすぎないことを、この物語は同時に語っているのである。「むかし、をとこ」が脇役に墮ちざるを得なかった理由は、これを見ても明らかのように、もはや主役として現実に対処しえぬ作者の主体に由来しているのであろう。

この段の原形は恐らく在本のように「年だにも」の歌までであったろう。しかし、やがて雅本のように三首目の歌が付加され、さらに「秋や来る」の四首目を添えて終止符をうつが、それは補足というよりも蛇足であり、脇役たる「むかし、をとこ」の讚美を意図して、逆に有常の戯画化に成功してしまった皮肉な例である。

(D)の諸段が(A)・(C)のそれと違って、表現形式の上で「むかし、を」ところの定型を踏む段が異常に少ないことは前に指摘した。そして、この事実が、主人公の役割と密接な関連をもつことも折に触れて述べてきた。さて(D)の段では、この事実が果たしてどう具体化されているだろうか。

まず史実との対比において特徴をもつ77・78段について見よう。この二段は、文徳天皇の女御多賀幾子の法事をめぐって、実在の人名を明示し、時や場所を限定して実録風につづった一連の物語である。さらに79段も在原氏出の女性が皇子を生んだという史実に準拠した物語である点前者と共通した性格をもっている。しかし、史実に準拠したとはいえず、前二者は余りに史実とかけ離れた作為に満ちていること、すでに先学の究めつくしたところではあるが、問題はそれで終わったわけではない。78段の山科禪師について「時代の証もむなしきもの也。高岳・人康いづれの御うへともさだめぬが、此文をよむ心しらひなるべし」(よしやあしや)と述べた上田秋成の考えは、文学作品をすべて史実で裏づけようとする行き方に反省を加えた意味では、重要な発言といえるが、ではなぜ作者はことさら拙い作為を史実に求めたのか、その疑問に対する解答とはならないだろう。その意味で、史実との相違を作者の方法として具体的に測定しようとされた金田元彦氏の考察(『古代宮廷の史書と伊勢物語の交渉——山科禪師考』日本文学論究第20冊『業平雑記』所収)は貴重である。金田氏は伊勢物語について「現実には起った事件を、すぐそのままだに即物的にとらえた文学では決してなく、少なくとも物語のある

部分は、ある時代の一時期を基点として過去にさかのぼり、遠くへだたってしまったむかしの事柄を、追憶している文学である」とする視点から、77・79段の物語の特質を、追憶の集積の中に捉えようとされた。この視点に立てば、客観的に不確かな事柄も、追憶という主観の世界においては確実な事実となつて、一切の矛盾を解消させるだろう。しかし、この虚構化の方式が、第一次伊勢のそれと異質であるという一点を除いたら、文学一般論に偏する危険がある。その意味において、これら諸段に登場する「むかし、を」ところが「右の馬の頭なりける翁」(77段)また「右の馬の頭なりける人」(78段)という端役であることを見過してはならない。

伊勢物語は第二次成立の末期において、かつての恋の英雄は消え失せ、現実に生息する一卑官の畏縮した姿が、追憶という余勢をかって辛うじて存在するに過ぎないのであった。その歌は、晴れの歌という名の献上歌(77・79)か、さもなくば女の気色をうかがう歌(18・43・52・100段)、それも返歌がほとんどある。伊勢物語の歌は、その主人公の位置と相俟って、ここに大きな衰退期を迎えたのである。

——昭和四十三年一月三十日稿——